

コンスタンティノープルを遠く離れて  
——総主教アタナシオスの初期の書簡写本と近年の研究を概観する——  
Far Away From Constantinople: A Survey of the Early Manuscripts of  
Patriarch Athanasios I and of Some Recent Studies

橋川 裕之 / Hiroyuki HASHIKAWA

早稲田大学高等研究所 助教

Assistant Professor, Waseda Institute for Advanced Study(WIAS)

169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

Tel :03-5286-2460 , Fax: 03-5286-2470

1-6-1 Nishiwaseda, Shinjuku-ku, Tokyo 169-8050, Japan

Tel: +81-3-5286-2460 ; Fax: +81-3-5286-2470

E-mail address: hashikawa@aoni.waseda.jp

March 18 2008

## 抄録

コンスタンティノーブル総主教アタナシオス 1 世（在位 1289-93 年、1303-9 年）は、ビザンティン教会における特異な改革者としてのみならず、精力的な書簡の書き手としても知られている。本稿の主な目的は、1453 年までにビザンティン帝国内で成立したと考えられるアタナシオスの書簡写本の特徴を、それらをめぐる近年の研究とあわせて概観し、写本が制作された具体的な状況に迫ることである。関係する写本は以下の三つのグループに分類される。1. ヴァティカン写本（Codex Vaticanus Graecus 2219）、2. アレクサンドリア写本（Codex Alexandrinus Graecus 288）、3. シナイ写本（Codex Sinaiticus Graecus 42）とパキュメレスの史書、学説が紹介される研究者は、A・M・タルボット、I・ペレス・マルティン、M・パテダキス、I・シェフチェンコである。これらの概観からは、写本の制作者は、アタナシオスに批判的な同時代史家パキュメレスを別とすれば、おおむね彼に好意的であったこと、また、いずれの写本も公的というよりは、むしろ私的なプロジェクトとして制作された可能性が高いことが明らかになる。なお本稿は、2007 年 10 月 20 日に早稲田大学で開催された地中海研究所シンポジウム「ビザンティン写本研究の現在」での筆者の報告の一部を発展させたものである。

## はじめに

写本は歴史を学ぶ者にとって基本的な史料の一つでありながら、わが国の西洋中世史研究においては長らく、あたかも存在しないもの、目を向けなくてよいものであるかのよう  
に扱われてきた。わが国のビザンティン史研究においても状況はさして変わらなかったが、  
美術史研究者が比較的早くから写本挿絵を精力的に検討し始めていたために、歴史研究者  
が写本を遠ざける姿勢は西ヨーロッパ史研究の世界以上に際立っていたかもしれない。か  
くいう私も写本の重要性には長らく気づかないでいた。はばかりずいえば、研究を始め  
た頃は写本学や古書体学はもとより、文献学全般を知らないでいたし、それらを学ぶ必要  
があるとも感じていなかった。I・シェフチェンコやJ・メイENDORFFのような欧米の名  
だたるビザンティニストたちがときにテキストの校訂を行っていることをすぐに知りまし  
たが<sup>1</sup>、歴史学者は刊行されたテキストのみを参照すれば事足りると考えていたし、テキ  
ストに添えられた文献学的な序文や解説を理解するつもりもなかった。刊行史料や論文でた  
びたび目にする写本伝来（マニュスクリプト・トラディション）という語やステマ（写本  
の制作年代と関係を示す系統図）と称される図が何であるのかも知らなかった。私が研究  
を続けるべく大学院に進学することを決意したのは 10 余年前のことであるが、当時、西  
洋中世史研究にとっての写本の重要性を力説する者も、文献学の基礎知識を教えてくれる  
者も周囲には誰一人いなかった<sup>2</sup>。

ビザンティン写本は大学院に進学した私の前に、一つの壁として立ちはだかった。これ  
は私がビザンティン末期の歴史を主題に選んだことに起因した。ビザンティン帝国の現存

---

<sup>1</sup> たとえば、Ihor Ševčenko, *Etudes sur la polémique entre Théodore Métochite et Nicéphore Choumnos* (Brussels, 1962)や Grégoire Palamas, *Défense des saints hésychastes : Introduction, text critique, traduction et notes*, ed. Jean Meyendorff, 2 vols. (Louvain, 1959). 1922 年生まれ of シェフチェンコは今年で 86 歳になるが、年末にドイツの出版社 De Gruyter から、続テオファネス年代記の校訂版を出版するらしい（同社ウェブサイトの情報による）。この書物は *Corpus Fontium Historiae Byzantinae* シリーズの 1 冊で、予定タイトルは *Chronographiae quae Theophanis Continuati nomine fertur Liber quo Vita Basilii Imperatoris amplectitur*.

<sup>2</sup> わが国の西洋中世史研究において、写本を利用しないし分析しようとする学者がここ数年で著しく増加したのは間違いない。そうした現象を史料論の流行と片付けてしまうのは有益ではあるまい。欧米の大学へ留学する若手研究者の増加、一時期隆盛をきわめた社会経済史の退潮、紹介と奇抜な解釈に力点が置かれた伝統的研究姿勢への懐疑ないし反省など、これには様々な要因が考えられる。ただし最近出版された西洋中世史研究の補助学についての簡明な概説書（高山博・池上俊一編『西洋中世学入門』東京大学出版会、2005 年）がヨーロッパ地域（いわゆるラテン的西方）しか扱っていないことから窺えるように、こうした新たな潮流はわが国のビザンティン史研究にはほとんど及んでいない。

史料は時代が下るにつれて格段に増加するため、帝国最後の 2 世紀、いわゆるパレオロゴス朝期の史料には今日でも未刊行であったり校訂が不十分であったりするものが少なくない。考察可能なテーマを見出すべく 13 世紀から 14 世紀にかけての歴史を扱った二次文献を検討する過程で、私は、特異かつラディカルな教会改革を企図した人物として数多の概説書で言及されているコンスタンティノーブル総主教アタナシオス 1 世(在位 1289-93 年、1303-09 年)に注目したが、アタナシオスが残した書簡は一部しか刊行されていなかった。彼が歴史的に重要な教会人であるのは明らかであるにもかかわらず、研究者たちはアタナシオスを素通りするか、彼の書簡を含む写本の前で立ち止まっていた。したがって、私は写本の重さと自らの未熟さを痛感しながら、1970 年代に刊行された二つの大作、すなわち A・M・タルボットによる一部書簡の校訂版<sup>3</sup>と V・ローランによる総主教座文書目録<sup>4</sup>を頼りに、アタナシオスの書簡への接近を試みた。

2001 年から翌年にかけて一年間暮らしたバーミンガムでは、アタナシオスの書簡写本との予期せぬ出会いがあった。誰がそれをバーミンガム大学の図書館に入れたのかいまだにわからないでいるが、アタナシオスの主要書簡写本であるヴァティカン・ギリシャ語写本 2219 番 (Codex Vaticanus Graecus 2219/以下、ヴァティカン写本と略) の一部フォリオの複写が、他の図書とともに無造作に書棚に置かれていたのである。バーミンガム大学には A・ブライアーの尽力でビザンティン・オスマン・近代ギリシャ研究所なる施設が設置されており、図書館にはビザンティン関係の図書が大量に配架されていた。しかし、私が修士課程の大学院生として籍を置いたこの研究所に、アタナシオスの書簡写本への参照が必要なスタッフや学生は過去にさかのぼってもいないように思われたし、13 世紀の歴史記述と法文化を専門とする指導教官 R・マクリデス博士も取り寄せたのは自分ではなく、そもそも複写の存在も知らずにいたと答えた。その由来は謎に包まれていたが、私はこの写本の複写との偶然の出会いに当然ながら驚き、そして歓喜した。この複写によって私はヴァティカン写本の文字 (スクリプト) を初めて目にしたし、現物が所蔵されているヴァティカンではなく、自らが留学先に選んだバーミンガムでそれに遭遇したことに因縁めい

---

<sup>3</sup> Alice-Mary M. Talbot, *The Correspondence of Athanasius I Patriarch of Constantinople : Letters to the emperor Andronicus II, members of the imperial family, and officials* (Washington, D.C., 1975)(以下、Talbot, *The Correspondence* と略)。タルボットはコロンビア大学時代のシェフチェンコの弟子。

<sup>4</sup> Vitalien Laurent, *Les Regestes des actes du Patriarcat de Constantinople*, vol. 1 : *Les actes des Patriarches*, fasc. 4 : *Les regestes de 1208 à 1309* (Paris, 1971) (以下、Laurent, *Regestes* と略)。

たものを感じずにはいられなかった。とくに私の知的好奇心を刺激したのは、複写されたフォリオがタルボットの校訂版に含まれていない、ヴァティカン写本の未刊行部分だったことである。ここバーミンガムで、アタナシオスの未刊行の書簡を読み解くことができる。私の胸は高鳴った。幸いにも私は新約聖書学者 D・C・パーカー教授のギリシャ語古書体学の授業に参加しており、時間さえかければ何とかなるだろうと判断し、空き時間に図書館の中でテキストを書き写し始めた。しかし写本はここでもやはり壁であった。通常のギリシャ語の読解すらままならない状態で写本を読み込んでいくのは無謀であるし、たとえ時間をかけて読めたとしても、その成果をもとに英語で修士論文を書くのはほぼ不可能なことに思えた。中世ギリシャ語に堪能なギリシャ人学生であれば、テキストの校訂によって学位を取得することができるが、これは私には不可能な選択であった。ここで再び、私は写本の重さと自らの未熟さに打ちひしがれ、せめて帰国後にも自由に参照できるようにと複写フォリオ全体を複写して別の課題へと向かった。

私の心に多少なり慰めが与えられたのは、しばらく後、一人のギリシャ人学生がアタナシオスの未刊行書簡の校訂に乗り出したらしいとマクリデスから聞かされたときである。マクリデスはダンバートンオックス図書館のディレクターを務める (A・M・) タルボットから伝え聞いた話としてそれを教えてくれた。オックスフォード大学の博士課程に在籍するそのギリシャ人学生は、アタナシオスの書簡の転写と読解は実に困難であると、かつてヴァティカン写本の一部を校訂したタルボットに語ったという。未刊行部分のフォリオの文字はギリシャ語写本に不慣れな私にも乱雑なものと思えたので、ビザンティン文献学の訓練を受けたギリシャ人の学生にとっても決して容易には読めないのだとわかって少し安堵した。

マノリス (英語ではエマニュエル)・パテダキスという名のこの学者は、2004 年の第 2 学期 (ヒラリーターム) にオックスフォード大学に学位論文を提出し、哲学博士号を取得していた<sup>5</sup>。同年にビザンティンの修道士のリヨン教会合同への反応について検討した論文<sup>6</sup>を提出し、バーミンガム大学の修士課程をようやく修了した私は、博士論文はアタナシオスについて書こうと心に決めていた<sup>7</sup>。留学する以前からアタナシオスへの自らの理解を深

---

<sup>5</sup> Emmanuel Patedakis, *Athanasios I Patriarch of Constantinople (1289-1293, 1303-1309): A critical edition with introduction and commentary of selected unpublished works* (D.Phil.Thesis, The University of Oxford, 2004).

<sup>6</sup> *Byzantine Monks and the Union of Lyons* (M.Phil.Thesis, The University of Birmingham, 2004).

<sup>7</sup> この決意は「コンスタンティノーブル総主教アタナシオスと末期ビザンツ帝国の危機」

める必要を感じてはいたが、是が非でもアタナシオスを研究せねばという思いに駆られたのは、バーミンガムでヴァティカン写本の複写に跳ね返された苦い記憶が薄らぐ前に、同世代の学者がアタナシオスの残りの書簡の校訂に挑もうとしていることを知ったからであろう。おそらくは情報の乏しさと目の前の仕事への没頭のため、同じ時期にバーミンガムとオックスフォードにいながら我々が顔を合わすことはなかった<sup>8</sup>。イギリスの大学図書検索サイト（COPAC）を利用してパテダキスが論文を提出したことを確認し、期待と不安を抑えつつ、私は大英図書館から彼の論文を取り寄せた。

それは様々な点で私を圧倒する大作であった。彼がこの論文で校訂した書簡は 17 通とタルボットの仕事で残された書簡の四分の一ほどであったが、冒頭には 150 ページに及ぶ序説が置かれ、一つ一つの書簡テキストには膨大な量の解説が付されていた。彼がアタナシオスの書簡だけでなく、関連する一次史料や二次文献をも丹念に検討したことは一目瞭然であった。より重要なことに、彼は近代以前のギリシャ語に精通したギリシャ人学者として、アタナシオスの言語、文体、そして写本に関する数々の新見解を提示していたし、後述するように、従来散逸したと考えられていた二通の書簡を再発見していた。私はアタナシオスが総主教時代に試みた改革の推移とコンテキストに焦点を当てて博士論文を書くつもりであったので、当初の執筆予定を大幅に変更する必要には迫られなかったが、文学の意義と可能性に目を見開かされたし、それまで文献学や言語学に十分な注意を払ってこなかった自らの知的怠慢を恥じた。彼の仕事から多大な刺激を受けた私は、アタナシオスの書簡と写本についての独自の考察を博士論文に含めることに決めた<sup>9</sup>。

---

と題する博士論文（京都大学大学院文学研究科、2006 年度提出）に結実した。

<sup>8</sup> 我々が初めて顔を合わせたのは昨年末、パテダキスが 2007 年秋から 2008 年夏までフェローとして所属するダンバートンオークスにおいてである。パテダキスは 2000 年から 2004 年までオックスフォード、マートンカレッジの中世・近代言語学部に在学してエリザベス・ジェフリーズの指導を受け、学位取得後は彼のギリシャでの母校であるクレタ大学でビザンティン文献学の講師を務めている。彼はアタナシオスの残りの全書簡を校訂し、タルボットの版と同じく、テキストに英訳と解説を付して出版するつもりであると私に語った。彼がこれまでに発表した論文は ‘Η διαμάχη του πατριάρχη Αθανασίου Α΄ με τον κλήρο της Αγίας Σοφίας (1289-1293, 1303-1309) μέσα από ένδεκα ανέκδοτες επιστολές (1306-1307)’, *Ελληνικά* 56 (2006), 279-319（聖ソフィア教会聖職者に関する書簡 11 通の校訂テキストを収録）、刊行予定のものは ‘Οι διαθήκες των πατριαρχών της πρώιμης Παλαιολόγιας περιόδου (1255-1309)’, *Θησαυρίσματα* 37 (2007), 1-20; ‘The text behind the text : from the case of a simple quotation to the inspired allusion in the writings of Symeon the New Theologian’（エリザベス・ジェフリーズとマイケル・ジェフリーズの記念論集に掲載予定）。これら論文の抜き刷りと複写を私に贈ってくれたパテダキスに記して感謝申し上げたい。

<sup>9</sup> 博士論文の補論 1「アタナシオスの直筆写本は現存するか？」と補論 2「声を救う——ア

ビザンティン写本をめぐる諸問題を討議するために開かれた早稲田大学地中海研究所のシンポジウムで私が報告する機会を与えられたのは、私がアタナシオスという一人物を通じて、写本に接近しようと苦闘していたためであろう。それまでほとんど思い至らなかったことだが、ビザンティンのギリシャ語写本に向き合うという点では、イギリスから日本に戻った後でも、私は決して孤立した存在ではなかった。というのも、このシンポジウムではわが国のビザンティン写本研究の先達、大阪大学名誉教授の辻成史先生<sup>10</sup>を筆頭に、6人も研究者が報告を行うことになっていたからである。パテダキスの論文やその他の研究に啓発され、歴史学と隣接諸学の間により注意深く目を向けるようになっていた私は、このシンポジウムにおいて、「アーカイヴとしてのコーラ——総主教アタナシオス書簡集 Vat. Gr. 2219 の場を求めて」と題する報告を行い、ヴァティカン写本が制作された状況とそれが関係した場所についていくつかの仮説を提起した。本来この報告の原稿をここに掲載すべきであったのだが、紙幅の都合により、アタナシオスの書簡写本に関する諸問題を概観する論文を新たに執筆して投稿することにした。自伝的な情報を含むいささか長い前書きを置いたのは、ビザンティン研究における写本の両義的性格を示すためである。写本は我々を容易には寄せ付けないが、関心を抱く者にはつねに開かれているし、それと真摯に向き合い問いを発すれば、必ずや何らかの有意義な答えを返してくれる。私はそのことをアタナシオスの書簡写本とそれに向き合った文献学者の仕事を通じて、そしてこのたびのシンポジウムへの参加を通じて改めて学んだ<sup>11</sup>。

シンポジウム後に書かれた本稿には、ビザンティン写本は無視できない歴史史料の一つであるという私の確たる認識が反映されている。以下で関連する研究とともに概観されるのは、総主教アタナシオスの初期の書簡写本である。それらは以下の三つのグループに分

---

タナシオス書簡集の起源について」がそれに当たる。拙稿「ガレシオンの修道士アタナシオスとは何者か——パリ・ギリシア語写本 857 番とビザンツの修道院文化」『史林』90 巻 4 号、93-115 頁は補論 1 の第 1 節に修正を加えたもの。

<sup>10</sup> 辻先生は昨年秋、K・ワイッツマンの訳書、『古代・中世の挿絵芸術——その起源と展開』（中央公論美術出版）を上梓された。

<sup>11</sup> 付言しておけば、シンポジウムには辻成史先生を称えるという、当日まで秘められた第二の目的があった。この二重の目的を持つシンポジウムに報告者として参加できたことは私にとって身に余る光栄であり、辻先生、益田朋幸先生を始めとする本学の関係者の方々（編集でご迷惑をおかけした櫻井夕里子さんにはお詫びも）、そして当日ご来聴された方々に心からの感謝を表したい。なおシンポジウムでの報告後、辻先生とタルボット博士は同時期（1960 年代後半）にダンバートンオークスで学ばれており、旧知の間柄であるということ辻先生からお教えいただいた。辻先生の旧友であるタルボット博士とアタナシオスへの関心を共有する私が、辻先生を称える場で報告していたことにも私は不思議な縁を感じた。

類することができる。一つは、最古かつ主要な写本とされ、タルボットによってその一部が刊行されたヴァティカン写本、二つ目はパテダキスによってその意義が見出されたアレクサンドリア・ギリシャ語写本 228 番 (Codex Alexandrianus Graecus 228/以下、アレクサンドリア写本と略)、最後は、アタナシオスが総主教に復位するまでに書いた書簡を含む、シナイ・ギリシャ語写本 42 番 (Codex Sinaiticus Graecus 42/以下、シナイ写本と略) とゲオルギオス・パキュメレスの史書<sup>12</sup>である。写本名に含まれた地名は現在、写本が保存されている土地と、過去にその写本に興味を持ち、何らかの方法でそれを取り寄せた人々が暮らしていた土地を示す。興味深いというべきか、当然というべきか、コンスタンティノーブルで書かれたはずのアタナシオスの書簡はすべて、コンスタンティノーブル以外の地にある写本の中にある。いささか簡略なものではあるけれど、以下に続く説明は、いずれもコンスタンティノーブルを遠く離れたそれらの写本が、それらに形を与えた世界を見るための重要な窓となりうることを示すであろう。

## 1. ヴァティカン写本 (Codex Vaticanus Graecus 2219)

総主教アタナシオスは精力的な書簡の書き手であった。我々がそれを知っているのは、アタナシオスが記したとされる多数の書簡が様々な写本の中に含まれているからである。アタナシオスの一つの異色さは、彼はいわゆるビザンティンの知識人でなかったにもかかわらず、その書簡が今日まで伝わっていることである。ビザンティン帝国は古代的な初等教育と識字率を高い水準で維持したと一般にみなされ、政治エリートや知識人層に限らず、多くの人々が日常的に書簡を利用していたと考えられる。ただしこれらの書簡は、写本に転写され書物の体裁にまとめられなければ、たいていは散逸する定めにあった<sup>13</sup>。ビザンティンの知識人は自らが執筆する書簡の文学的ないし政治的価値を十分自覚していたので、存命中に自らの書簡集を編纂することがよく見られた。典型的な例は、自らの書簡集を簡

<sup>12</sup> ゲオルギオス・パキュメレスはパレオロゴス朝初期の代表的知識人の一人。聖職者として大教会（聖ソフィア教会）に勤務するかたわら、学者としても活動し、多分野に及ぶ浩瀚な著作を残した。彼の史書は初期パレオロゴス朝の基本史料の一つ。初期の主要写本は、ミュンヘン・ギリシャ語写本 442 番 (Monacensis Gr. 442)、ヴァティカン・バルベリーニ・ギリシャ語写本 198 番 (Vaticanus Barberianus Gr. 198)、ヴァティカン・バルベリーニ・ギリシャ語写本 203 番 (Vaticanus Barberianus Gr. 203) の三つ、いずれも 14 世紀中葉に制作された写本である。Georges Pachymérès, *Relations historiques*, ed. Albert Failler and tr. Vitalien Laurent, vol. 1 (Paris, 1984), xxiii-xxvii.

<sup>13</sup> 例外はパピルスに書かれた書簡や、皇帝や総主教が修道院等に発行した証書の類。ビザンティンの書簡作成（エピストログラフィー）は近年、注目を集めている領野の一つである。L'épistolographie et la poésie épigrammatique (Paris, 2003)所収の諸論文を参照。



略な自伝を添えて物したキプロス出身の総主教グレゴリオス 2 世（在位 1283-89 年）である。アドリアノーブルの一般家庭に生まれ、年少期から修道生活を志したアタナシオスは、大都市で高等教育を受け、聖俗ヒエラルキーでの昇進を目指す知識人集団とは価値観を大きく異にしており、知識人的な自意識にもとづいて自らの書簡を編纂しようとはしなかったと思われる。とすれば、なぜアタナシオスの複数の書簡写本が今日まで伝わっているのだろうか。

アタナシオスのまとまった数の書簡を含む写本の中で、もっとも早くに制作されたと考えられているのはヴァティカン写本である。タルボットと S・リッラ<sup>14</sup>によれば、ヴァティカン写本の基本的特徴は以下のとおり。筆跡から判断される制作年代は 14 世紀前半。素材は、冒頭の 2 枚の白紙と 274 フォリオを除き、すべて羊皮紙（パーチメント）。大きさは縦 240 ミリ、横 161 ミリ<sup>15</sup>。合計のフォリオ数は 274。筆跡は 5 種。1 フォリオ表から 89 フォリオ裏までは小さく、整った筆跡。93 フォリオ表から 99 フォリオ表までは同じく小ぶりであるが、より角度のある筆跡。100 フォリオ表から 273 フォリオ裏まではより大きくボードな筆跡（3 つの異なる筆跡が確認されるここまでのフォリオを便宜的に 3 部に区分する）。羊皮紙ではなく紙が使用された 274 フォリオの表は後世の筆跡（16 世紀）、最後は書簡のタイトル部の筆跡。

写本の 273 フォリオ裏にはローマの枢機卿、ジョヴァンニ・サルヴィアティ（1490-1553 年）の名が記入され、さらに最初の 2 枚の白紙には彼の印が押してあるので、ヴァティカン写本は 16 世紀前半にサルヴィアティの所有物になったことがわかる<sup>16</sup>。この写本は 19 世紀にヴァティカン教皇庁図書館の蔵書となり、今日に至る。コンスタンティノーブルで制作されたと思いきこの写本がイタリアに渡っていること自体は別段不思議ではない。というのも、ビザンティン帝国の滅亡と前後して、帝国内の様々な地にあったギリシャ語写本が様々な経路で海外に持ち出されたからであるし、とくにビザンティンのギリシャ人知識人の多くがイタリアを亡命先に選んだことで、彼らとともに多くの写本がイタリアに移

---

<sup>14</sup> Salvatore Lilla, *Codices vaticani graeci : codices 2162-2254* (Vatican, 1985), 212-22 (codex 2219).

<sup>15</sup> タルボットは縦 23.8 センチ、横 15.5 センチと表記しているが、より最近のリッラの記述を優先した。Talbot, *The Correspondence*, xxxiii; Lilla, *op.cit.*, 212.

<sup>16</sup> Talbot, *op.cit.*, xxiii. ヴァティカン写本を含むサルヴィアティの蔵書については、Annaclara Cataldi Palau, 'La biblioteca del Cardinale Giovanni Salviati : Alcuni nuovi manoscritti greci in biblioteche diverse della Vaticana', *Scriptorium* 49 (1995), 60-95 を参照。

動することになったからである。教会合同への強硬な反対派であり、ラテン人に対する不信を隠さなかったアタナシオスの書簡写本が、なぜローマの枢機卿の手に渡ったのか詳細は不明であるが、16世紀半ば、このヴァティカン写本はローマにおいて何度か転写され<sup>17</sup>、対抗宗教改革を勢いづけたトリエント公会議（1545-63年）の中である役割を果たすことになる<sup>18</sup>。

内容はアタナシオスの180余通の書簡、説教、ネアラと呼ばれる新法草案、そして彼を宛て先とする数通の書簡から構成され、収録点数はアタナシオスの写本の中で最多である。第一部には皇帝アンドロニコス2世パレオロゴス（在位1282-1328年）や皇族を宛て先とする書簡<sup>19</sup>、第三部には聖職者や修道士、民衆らを宛て先とする書簡が主に収録されている。第二部には修道士と修道女を宛て先とする書簡とアタナシオスが最晩年に記したと思しき弟子たちへの遺言書的な書簡の二通しか含まれていない。

ヴァティカン写本に関する大きな問題は二つある。一つは誰がそれを何のために制作したのかという問題、もう一つは特定書簡の真贋の問題である。いずれもテキストの外部、つまりはコンテキストに関係する、文献学者のみならず歴史学者の関心も惹く問題である。

一つ目の問題に対し、最初に暫定的な解答を提示したのはタルボットである。タルボットは、晩年のアタナシオスが視力の衰えから、周囲にいる弟子の修道士を用いて口述筆記していた可能性を指摘し、アタナシオスがヴァティカン写本の制作に写字生として関与した可能性を否定する。続いて彼女は、写本の制作年代の早さとその網羅的性格に注目し、書簡の制作者はアタナシオスの弟子の三名であったと推論する。したがって彼女の見解で

---

<sup>17</sup> これらの写本は、パリ補遺ギリシャ語写本 516 番 (Parisinus Suppl. Gr. 516)、ナポリ・ギリシャ語写本 II・B・26 番 (Neapol. Gr. II B 26)、パリ・ギリシャ語写本 137 番 (Parisinus Gr. 137)、ヴァティカン・オットボーニ・ギリシャ語写本 93 番 (Ottobonianus Gr. 93)。いずれの写本もヴァティカン写本全体の転写ではなく、一部フォリオにアタナシオスの書簡およびその他の著述（主にネアラ）を含むという形をとる。15世紀以降に制作されたその他のアタナシオスの書簡写本については、Patedakis, *op.cit.*, 128-33 を参照。

<sup>18</sup> 枢機卿サルヴィアティと交友のあったスペイン出身のイエズス会士フランシスコ・トーレスは、主教の居住地問題に関係するアタナシオスの書簡をラテン語訳し、同じ問題を扱った自著に附録として収めた。タルボットは、トーレスが参照したのはヴァティカン写本であると推測している。Talbot, *The Correspondence*, xliii. トーレスはその書物をトリエント公会議開催中の1551年にフィレンツェで出版しているので、彼はアタナシオスの書簡を対抗宗教改革のために意図的に利用したことになる。

<sup>19</sup> 大半は皇帝アンドロニコス2世宛ての書簡。タルボットが校訂版を刊行したのはこの第一部に当たる。ただし彼女は以下の3点の文書を除外している。回覧書 (ff. 19r-28r : Laurent, *Regestes*, no. 1692)、ネアラ (ff. 50v-52r : Laurent, *Regestes*, no. 1607)、皇帝への指導書 (ff. 62r-66v : Laurent, *Regestes*, no. 1716)。

は、写本は、歴史資料を保存し後代に伝達するためというよりはむしろ、亡き師を偲ぶ弟子たちが「靈感を得る読書」に用立てるために制作されたということになる<sup>20</sup>。

タルボットのこのもっともらしい仮説には一つの問題点がある。すなわちそれは、ヴァティカン写本がアタナシオスに関係するその他のテキストと別の場所に保存されていることである。かりに弟子たちがヴァティカン写本の制作者であるなら、同じくアタナシオスの死後に弟子たちによって作成された聖人伝や奇跡報告書のような一連のテキストとそれが一緒に保存されていないのはなぜなのか。これらの聖人伝テキストの初期の写本はアトス山（主としてイヴィロン修道院）とハルキ島の聖三位一体修道院の図書室にある、ないしはあったことが確認できる<sup>21</sup>。この二つの土地にヴァティカン写本に類するアタナシオスの書簡写本が存在しないという事実、タルボットの仮説はもっともらしい説明を与えることができない。

ヴァティカン写本の制作をめぐる問題には、タルボットの研究から約 20 年後、スペインの文献学者ペレス・マルティンが総主教グレゴリオス 2 世の写本を検討する過程で接近し、注目すべき新説を提起した<sup>22</sup>。彼女の仮説は、タルボットのそれよりも具体的である。すなわちヴァティカン写本は総主教ヨアネス・グリキス（在位 1315-19 年）が主導した総主教座の歴史資料保存プロジェクトの一環として制作された、というのがそれである。なぜこのような写本制作の具体的コンテキストを提示することができるのか。ペレス・マルティンは写本の中にいくつかの証拠を見出している。彼女が注目したのは総主教グレゴリオスの初期の書簡写本の一つ、モデナ・ギリシャ語写本 82 番 (Codex Mutinensis Graecus 82) である。彼女はこの写本にはヨアネス・グリキス、大教会聖職者のゲオルギオス・ガレシオテス、14 世紀に活躍した学者ニケフォロス・グレゴラスの筆跡が確認できると主張した。これは写本の制作年代を 1310 年代後半に特定する情報となりうる。というのも、若きグレゴラスがグリキスと交友を持ったのは後者が総主教に就任する直前とされ、それにグリキスは総主教辞任後ほどなく他界したとされているからである。

---

<sup>20</sup> Talbot, *The Correspondence*, xxxvi.

<sup>21</sup> ハルキ島の聖三位一体修道院の蔵書はその後、コンスタンティノーブル総主教座の図書室に移転された。タルボットはハルキ島の蔵書がもともとは、アタナシオスが暮らしたクセロロフォスの修道院の蔵書であった可能性を指摘している。アタナシオスの聖人伝と奇跡譚の詳細については、Alice-Mary Talbot, *Faith Healing in Late Byzantium : The posthumous miracles of the Patriarch Athanasios I Constantinople by Theoktistos the Stoudite* (Brookline, Mass., 1983)の序文を参照。

<sup>22</sup> Immaculada Pérez Martín, *El patriarca Gregorio de Chipre (ca. 1240-1290) y la transmisión de los textos clásicos en Bizancio* (Madrid, 1996), 325-8.

ペレス・マルティンのより重要な貢献は、このモデナ写本とヴァティカン写本の連続性を発見したことである。連続性は3点に及ぶ。一つは大きさであり、縦240ミリ、横160ミリのモデナ写本の大きさはヴァティカン写本の大きさとほぼ同じである。もう一つは筆跡であり、彼女はヴァティカン写本の第一部の筆跡を、モデナ写本の一部にも確認されるゲオルギオス・ガレシオテスのものと特定している<sup>23</sup>。三つ目は、写本を構成する羊皮紙の小束の連続性である。細部に立ち入ることは避けるが、彼女はこれらの連続性にもとづき、当初、アタナシオスとグレゴリオスの二人の総主教の書簡が一冊の写本に集成される予定であり、文人としても知られた総主教グリキスが総主教座のアーカイヴを充実させるべくこの事業を指揮したと結論づけている。

古文書学的知見に立脚して提起されたペレス・マルティンの仮説はタルボットのそれよりも説得的で魅力的でもあるが、問題点がないわけではない。当時、アタナシオスは教会会議で解任された元総主教として市内の修道院にひっそりと暮らしており、ミサを行うことも弟子たちに説教することも禁じられていた<sup>24</sup>。14世紀半ばまで名誉回復を受けなかったと思しきアタナシオスの書簡が、1310年代後半に集成され、総主教座の図書室に収蔵されたという想定はいくぶん疑問の余地がある<sup>25</sup>。写本冒頭の表題でアタナシオスが「我らが聖なる父」と言及されていること<sup>26</sup>、アタナシオスから皇帝や一部の教会人に対し痛烈な批判の発せられる書簡が写本に含まれていることもこの疑問を増幅させる。

ヴァティカン写本についてはパテダキスも新説を提起している。彼の新説は二つあり、その一つはペレス・マルティンの仮説よりも大胆といえるかもしれない。先にさほど大胆でない方の新説に言及しておけば、それはヴァティカン写本の書簡の見出しを記入したのは、アタナシオスの聖人伝の作者、ストゥディオスのテオクティストスではないかというものである<sup>27</sup>。テオクティストスは聖人伝を含め、アタナシオスに関する複数のテキストを作成した修道士であり、アタナシオスと面識があったことを聖人伝の冒頭で明かして

<sup>23</sup> Pérez Martín, *op.cit.*, 328; eadem, 'El Vaticano gr. 112 y la evolución de la grafía de Jorge Galesiotes', *Scriptorium* 49 (1995), 42-59. パテダキスも独自に筆跡を比較し、ペレス・マルティンの主張の妥当性を確認している。Patedakis, *op.cit.*, 135-7.

<sup>24</sup> Cf. Talbot, *The Correspondence*, no. 115.

<sup>25</sup> 筆者はシンポジウムの報告で、ヴァティカン写本が関係した場について、タルボットのそれともペレス・マルティンのそれとも異なる、第三の仮説を提起した。

<sup>26</sup> Talbot, *The Correspondence*, no. 1 (p. 2): '† Τοῦ ὁσίου πατρὸς ἡμῶν Ἀθανασίου πατριάρχου Κωνσταντινουπόλεως ἐπιστολαὶ πρὸς τε τὸν αὐτοκράτορα καὶ πρὸς ἑτερους, πολὺν τὸν θεῖον ζῆλον ἐμφαίνουσαι'.

<sup>27</sup> Patedakis, *op.cit.*, 164-5.

いる。パテダキスは、このテオクティストスの聖人伝の語彙と書簡見出しの語彙の共通性を指摘している。確かに、見出しはときに生前のアタナシオスをよく知る人物でなければ書けないような記述を含んでいたりもするのだが、より積極的な証拠がなければテオクティストスをヴァティカン写本に関係づけることはできない。

もう一つは、タルボットがかつて問題外と評して否定したそれ、つまり、ヴァティカン写本はアタナシオスの直筆を含むという仮説である。タルボットによって全面否定された可能性をパテダキスはいかにしてよみがえらせたのか。彼が注目するのはヴァティカン写本と別の写本の間にある筆跡の類似である。パリ国立図書館には、ガレシオンの修道院に暮らすアタナシオスという名の修道士によって作成された、13 世紀に由来するギリシャ語写本が所蔵されている。11 世紀の修道士パウロス・エウエルゲティノスのフロリレギウム『シュナゴゲ』（修道生活に関するアンソロジー的著述）の第四部を収録するこの写本、パリ・ギリシャ語写本 857 番（Codex Parisinus Graecus 857／以下、パリ写本と略）の写字生アタナシオスは、一部の学者から若き日の総主教アタナシオスではないかと示唆されてきた。奥付に写字生が記した語句からは写本が 1261 年に制作されたことが判明し<sup>28</sup>、さらに、総主教アタナシオスが同時期にガレシオンに滞在していたことはほぼ確実であることから、パリ写本の筆跡が後の総主教アタナシオスのものである可能性は否定できない。パテダキスはこのパリ写本の筆跡とヴァティカン写本の第三部の筆跡が同一人物、つまりは総主教アタナシオスのものであると主張したのである。

両写本の筆跡が部分的に似ているのは事実である。私はパテダキスの学位論文の序説を読み進めてこの仮説に遭遇したとき、そんなことがありうるのかと強い衝撃を受け、バーミンガムから複写して持ち帰ったヴァティカン写本の複写を取り出し、文献学者や古書体学者が実際に行うように筆跡の検討に取り掛かった。パリ写本を 1 フォリオの片面でしか参照できず、バーミンガムの複写もヴァティカン写本第三部の全体に及ぶものではなかったため、確たる結論には到達できなかったものの、一部のアルファベットの形状やアルファベットの独特な組み合わせ方など、多数の類似点が確認され、両写本の筆跡が同一人物のものである可能性は高いと私には思われた<sup>29</sup>。

かりにパテダキスのこの主張が正しければ、ヴァティカン写本についての従来知見は、

---

<sup>28</sup> パリ写本の研究史については、拙稿「ガレシオンの修道士アタナシオスとは何者か」99-105 頁を参照。

<sup>29</sup> 詳しくは博士論文の補論 1 の第 2 節を参照。この部分的な筆跡比較の試みは別途論文として発表する予定。

アタナシオスの若年期と最晩年の生活についての知見とともに大幅な修正を迫られることになる。また、断罪されたままの元総主教が書簡集の制作に直接関与していたことになり、写本の制作を総主教座の公的事業とみなすペレス・マルティンの仮説はその説得力を減じることになる。しかし私が最近発表した論文で指摘したように、パテダキスの仮説はいくぶん性急なものである。なぜなら、二写本の写字生の同一を議論する前に、パリ写本の写字生が後の総主教アタナシオスであることを確証しなければならないからである。とはいえ二写本の成立年代には確実に半世紀以上の隔たりがあり、同一人物の筆跡であることが実際に証明されれば、総主教のアタナシオスが両写本の制作に関与したことが証明されたことになる<sup>30</sup>。

ヴァティカン写本に関する二つ目の問題は、偽書の有無である。ヴァティカン写本が偽書を含むという、アタナシオス研究者にとって看過できない指摘は、1990年代前半にパキユメレスの専門家 A・ファイエによってなされた<sup>31</sup>。ファイエが偽書であると主張したのは、ヴァティカン写本の中にあるアタナシオスの最初の辞任状（タルボットの版の 111 番）である。ヴァティカン写本にはアタナシオスがそれぞれ 1293 年と 1309 年に記したとされる二通の辞任状（二つ目は 112 番）が含まれている。ファイエが問題視したのは、パキユメレスがその史書で引用するアタナシオスの書簡とヴァティカン写本の 111 番の不一致である。パキユメレスは同時代の歴史家として、アタナシオスが最初の辞任に際して作成した複数の書簡をその史書に収録しているが、それらの書簡の中に 111 番と同一のものは見出せない。ところがパキユメレスは 111 番と大半の文章が重複する書簡を、アタナシオスが総主教座を去る直前に聖堂内の柱頭に隠し置き、1297 年に偶然発見された、敵対勢力に対する破門状<sup>32</sup>として紹介している。ファイエは二つの書簡の文面を比較検討し、111 番の書簡はパキユメレスが引用する破門状をもとに作成された偽書であると結論づけたのである。ファイエのこの主張に関係するのはペレス・マルティンの発見である。ペレス・マルティンはヴァティカン写本第一部の筆跡を大教会聖職者ゲオルギオス・ガレシオテスに帰した。ガレシオテスとパキユメレスの関係は不明であるが、ガレシオテスがパキユメレスの史書を参照しつつ、111 番の書簡を捏造したと考えることは不可能ではない<sup>33</sup>。タル

<sup>30</sup> 拙稿「ガレシオンの修道士アタナシオスとは何者か」114 頁、注 1 を参照。

<sup>31</sup> Albert Failler, 'La première démission du patriarche Athanase (1293) d'après les documents', *Revue des Etudes Byzantines* 50 (1992), 137-62.

<sup>32</sup> Pachymérès, *Relations historiques*, VIII, 23 ; Laurent, *Regestes*, no. 1553.

<sup>33</sup> 詳しくは博士論文の補論 2 の第 3 節を参照。

ボットによれば、ガレシオテスはパキュメレスの後任のプロテクディコス（聖職者法廷長官）であった<sup>34</sup>。

## 2. アレクサンドリア写本（Codex Alexandrinus Graecus 288）

ヴァティカン写本に次いで重要な書簡写本は、アレクサンドリア写本である。この写本は現在、アレクサンドリア総主教座の図書館に保存されている。写本カタログの作者モスホナスによれば、写本の大きさは縦 288 ミリ、横 210 ミリ、計 455 フォリオから構成されている（目次が記された冒頭の 2 枚は後代に添付されたもの）。内容はビザンティン時代に由来する様々な宗教的著述の寄せ集めである。モスホナスは制作年代を特定してはいないが、彼がカタログに転記した奥付の記述から、この写本は 1526 年にヤレザス（もしくはガレザス）なる人物の売却により、当時のアレクサンドリア総主教ヨアキム（在位 1487-1567 年）の手に渡ったことが知れるため、その制作年代は少なくとも 1526 年より前ということになる<sup>35</sup>。

このアレクサンドリア写本を再発見したことは、パテダキスのとりわけ大きな業績の一つである。モスホナスのカタログにアタナシオスの書簡への言及があるにもかかわらず、アレクサンドリア写本はアタナシオス研究者からほとんど注目されてこなかった。たとえばタルボットはモスホナスのカタログから、同写本の一部（145 フォリオ表から 231 フォリオ裏まで）にアタナシオスの書簡が含まれていることを知りつつも、内容を実際に確認してはいない<sup>36</sup>。タルボットがアレクサンドリア写本の重要性を見落とした原因は、モスホナスの写本カタログの記述そのものにあった。すなわち、モスホナスはアタナシオスに關係するフォリオについて一書簡の表題しか記述していないため、カタログの参照者は、アレクサンドリア写本に含まれるアタナシオスの書簡は一通しかないと誤解しかねない<sup>37</sup>。タルボットはこの書簡がヴァティカン写本の第三部の最初に配置された長大な回覧書<sup>38</sup>で

<sup>34</sup> A.P. Kazhdan et al. eds., *The Oxford Dictionary of Byzantium* (Oxford, 1991), s.v. 'Galesiotes, George' (A.-M. Talbot).

<sup>35</sup> Th.D. Moschonas, *Καταλόγοι τῆς Πατριαρχικῆς βιβλιοθήκης*, vol. 1: *Χειρόγραφα* (Alexandria, 1945; repr. Salt Lake City, 1965), no. 288. ヨアキムは 119 歳で没したとされ、当時としては（今日でもそうだが）異常に長命であった。ギリシャ正教・アレクサンドリアおよび全アフリカ総主教座のウェブサイト (<http://www.greekorthodox-alexandria.org/>) を参照。

<sup>36</sup> Talbot, *The Correspondence*, xli.

<sup>37</sup> Moschonas, *op.cit.*, 185. モスホナスはアタナシオス書簡の最後を 280 フォリオ裏と記述しているが、これは 231 フォリオ裏の誤り。

<sup>38</sup> Ff. 100r-121r ; Patedakis, *op.cit.*, no. 2; Laurent, *Regestes*, nos. 1737 and 1738.

あることを確認し、それ以上アレクサンドリア写本を問うことをしなかったのである。しかし、この書簡がヴァティカン写本で約 20 フォリオに及ぶきわめて長大なものであるとしても、ヴァティカン写本よりも大きなアレクサンドリア写本の 85 フォリオを占めることはありそうもない。アタナシオスの部分がモスホナスの記述どおり 85 フォリオに及んでいるならば、そこには彼の複数の書簡が収録されているはずだ。このことに気づいたパテダキスは、おそらくアタナシオスの研究者としては初めて、アレクサンドリア写本をその目で確認しようとしたのである。

いくつかの衝撃的な発見がパテダキスを待ち受けていた。アレクサンドリア写本には彼がおそらく予期していたとおり、アタナシオスの書簡が多数収録されていた。途中で破損したフォリオがあるため正確な数はわからないものの、40 通前後の書簡が収録されていたと思われる。書簡のほとんどはヴァティカン写本の第三部にあるものと一致する。それらはヴァティカン写本から転写された可能性が非常に高く、アレクサンドリア写本の写字生はヴァティカン写本を間近に置き、転写する書簡をその場で決めながら作業を進めていったと思われる。写字生がヴァティカン写本の進行方向を破っているのはわずかに一箇所のみである<sup>39</sup>。これ以上に重要な発見は、220 フォリオ裏から現れる二点のテキストに関する。ヴァティカン写本のそれと共通する書簡は同地点で終わり、この二点はヴァティカン写本に含まれないテキストである。最初のものは慈善に関する説教、それに続くのは皇帝アンドロニコスへの書簡である。

この二つのテキストの発見がアタナシオスを学ぶ者にとって衝撃的であるのは、いずれも過去に存在したことが明らかながら、散逸ないし未発見のため参照不可能なものだったからである。最初の説教についてみれば、テオクティストスのアタナシオス伝が重要な証拠となる。伝記の記述からは、テオクティストスがアタナシオスの書簡写本ないしそれに類する資料を参照したことが確認できる。彼は伝記においてアタナシオスの二つの説教に言及し、それぞれの冒頭の文章を引用している<sup>40</sup>。そのうちの一つはヴァティカン写本の第三部に含まれており、望めば参照することができる。パテダキスはテオクティストスの

---

<sup>39</sup> これはアレクサンドリア写本とヴァティカン写本（本注においてのみそれぞれ A、V と略）が、書簡の進行方向を同じくしているということである。例外は、ラウラ修道院宛ての書簡（A: ff. 210r-212v, V: ff. 252r-255r）の後。突如、ヴァティカン写本第二部の修道士と修道女に宛てられた書簡（A: ff. 212v-216r, V: ff. 93r-97r）が現れる。この書簡にはアトスの修道士宛ての書簡（A: ff. 216r-220r, V: ff. 261v-268r）が続き、進行方向が元に戻る。

<sup>40</sup> Talbot, *The Correspondence*, xli.



引用する冒頭の語句とアレクサンドリア写本の説教のそれが一致することを確認した、つまりは、長らく不明とされたもう一つの説教の所在を突き止めたのである。

皇帝宛ての書簡の発見はより劇的である。なぜなら、それは関係写本の焼失により、参照が不可能となっていた書簡だったからである。ヴァティカン写本を始め、他のいかなる写本にも含まれないとされたこの書簡は、かつて、ペロポネソス半島北部の内陸に位置するメガル・スピレウ（大洞窟）修道院の一写本に含まれていた。同修道院が所蔵した写本の多くは 1915 年にギリシャ人学者 N・ヴェイスが出版したカタログに記載されており、写本ごとの収録内容や個々のテキストの書き出しなどの書誌的情報は今日でも確認することができる<sup>41</sup>。ところが同修道院はカタログの出版から 19 年後の 1934 年の夏、大規模な火災に見舞われ、その蔵書は 4 冊の福音書を除き、すべて焼失した<sup>42</sup>。写本の複写は存在せず、さらにはこの時点でアタナシオスを熱心に追いかける学者も存在しなかったため、二次文献の中にもこの書簡への言及は皆無である。

パテダキスは、アレクサンドリア写本のアタナシオス関連フォリオの最後に配された皇帝宛ての書簡の書き出しが、ヴェイスがカタログに記した書簡の書き出しとほぼ一致することを発見した。失われたはずの書簡は失われてはいなかったのである<sup>43</sup>。この再発見は、この書簡がほとんど未知のアタナシオスの最晩年に光を投じるという点で、より学術的に価値あるものとなる。それは、アタナシオスが二度目の総主教辞任後に新たな論争に巻き込まれていたことを明らかにする。論争はアタナシオスが弟子たちのために記した遺言書の特記語句をめぐる生じていた<sup>44</sup>。アタナシオスは皇帝に宛てたこの書簡で自らの潔白を主張するとともに、名誉回復を彼に懇願している。遺言書の後に書かれていること、そしてヴァティカン写本に含まれていないことから、この書簡はアタナシオスの絶筆であっ

<sup>41</sup> Nikos Bees, *Κατάλογος τῶν ἐλληνικῶν χειρογράφων κωδίκων τῆς ἐν Πελοποννήσῳ μονῆς τοῦ Μεγάλου Σπηλαίου*, vol. 1 (Athens, 1915), no. 62.

<sup>42</sup> Talbot, *The Correspondence*, xli ; Alison Frantz, 'A lost manuscript from Megaspelaion', *The Art Bulletin*, 17 (1935), 397.

<sup>43</sup> Patedakis, *op.cit.*, no. 17 と同書簡の解説を参照。

<sup>44</sup> この遺言書と思しきテキストはヴァティカン写本の第二部に収録されているが、パテダキスによれば、論争の発端となった語句はテキスト中に確認できないという。問題の語句が転写される際に省略された、もしくはヴァティカン写本のものとは別の遺言者が存在した、とパテダキスは二つの可能性を考えているが、最晩年のアタナシオスがわざわざ二通の遺言書を物したとは考えにくく、前者のほうが有力であろう。14 世紀の反パラマス派の代表的修道士グレゴリオス・アキンディノスはその神学著述の中で、アタナシオスを支持する立場からこの論争に言及している。Gregorios Akindynos, *Refutationes duae*, ed. Juan Nadal Cañellas (Brepols-Turnhout, 1995), VI, 53. この情報を私に教えてくれたのはパテダキスである。

たと思われる。

かくしてパテダキスは、アレクサンドリア写本がヴァティカン写本の一部の書簡とヴァティカン写本にはない二つのテキストから構成される、きわめて貴重な史料であることを明らかにした。それではこのアレクサンドリア写本はいつ、いかなる経緯で制作されたのか。この問題にはここで踏み込むことはできないが、同写本がヴァティカン写本と密接な関係を持つことは明らかである。また、ヴァティカン写本にないテキストを含むことから、それらテキストの価値を知る何者かが、先行写本にあるアタナシオスのその他の書簡とともにその保存を企てたとも考えられる。この何者かはいずれパレオロゴス朝期の写本と筆跡に通じた学者によって明らかにされるかもしれない。

### 3. シナイ写本 (Codex Sinaiticus Graecus 42) とパキュメレスの史書

最後のグループ、シナイ写本とパキュメレスの史書は、収録数が格段に少ないうえ、収録された書簡もすべてアタナシオスが復位する 1303 年以前のものという点で、ヴァティカン写本ともアレクサンドリア写本とも系統が異なる。まずはシナイ写本について、カタログの作者ベネシェヴィチ<sup>45</sup>と後にこの写本を独自に調査したシェフチェンコ<sup>46</sup>の記述によりつつ、基本的な情報を確認しておこう。大きさは縦 194 ミリ、横 143 ミリ、合計のフォリオ数は 299。写本の末尾近く (292 フォリオ表) にビザンティン暦 6816 年 (西暦 1307 年 9 月から 1308 年 8 月) の 5 月 15 日の年代が付されていることから、それは遅くとも 1308 年 5 月 15 日までに制作されたことがわかる。内容の大半を占めるのは、13 世紀の文人修道士ニケフォロス・ブレミデス (1197-1269 年頃) の著述、バシリコス・アンドリアスと呼ばれる君主鑑<sup>47</sup> (11 フォリオ表から 28 フォリオ裏) および詩篇注解 (36 フォリオ表から 286 フォリオ表) であり、両作品の写字生は同一である<sup>48</sup>。

---

<sup>45</sup> V.N. Benešević, *Catalogus Codicum manuscriptorum graecorum qui in monasterio Sanctae Catharinae in Monte Sina asservantur*, vol. 1 (St. Petersburg, 1911), no. 28 (42) (pp. 25-7).

<sup>46</sup> Ihor Ševčenko, 'A new manuscript of Nicephorus Blemmydes' "Imperial Statue," and of some Patriarchal letters', *Byzantine Studies / Etudes Byzantines* 5 (1978), 223-32.

<sup>47</sup> シェフチェンコがシナイ写本に注目したのは、彼が H・フンガーとともに校訂版を用意していたブレミデスの君主鑑のテキストがその中に含まれていたためである。シェフチェンコは 11 フォリオ裏から 28 フォリオ裏までの作品がブレミデスの君主鑑であることを発見した。Cf. Herbert Hunger and Ihor Ševčenko, *Des Nikephoros Blemmydes βασιλικός Ἀνδριός und dessen Metaphrase von Georgios Galesiotes und Georgios Oinaïotes: Ein weiterer Beitrag zum Verständnis der byzantinischen Schrift-Koine* (Vienna, 1986).

<sup>48</sup> この写字生の筆跡は、Ševčenko, 'A new manuscript', plates 1 and 2 (pp. 231-2) を参照。

このシナイ写本に含まれるアタナシオスの唯一の書簡は、ブレミデスの著述の間に現れる（31 フォリオ裏から 32 フォリオ裏）。これはアタナシオスが 1297 年 9 月の破門状発見後に教会会議に宛てた謝罪の書簡であり、パキュメレスの史書に同じものが引用されている<sup>49</sup>。シナイ写本においてこの書簡は、その前にある総主教グレゴリオスの辞任状<sup>50</sup>（1289 年 6 月）、同ヨアネス・コスマスの辞任状<sup>51</sup>（1302 年 7 月）および謝罪状<sup>52</sup>（1303 年 6 月 21 日）の 3 通の書簡とともに総主教辞任関連文書集（29 フォリオ裏から 32 フォリオ裏）を形成している。

興味深いことに、これらの書簡はすべてパキュメレスの史書に引用があり、この事実は、何者かがパキュメレスの史書を参照しつつ、グレゴリオスら三名の総主教の辞任に関する書簡を転写した可能性を示唆する。一方、奇妙なのは、パキュメレスはアタナシオスが最初の辞任に関連して記した書簡を、ヴァティカン写本収録の 1297 年の皇帝宛ての書簡<sup>53</sup>を除き、すべてその史書に引用しているにもかかわらず、シナイ写本の写字生は 1297 年以前に書かれたアタナシオスの書簡を一つも転写していないことである。また彼はパキュメレスの史書に引用がある総主教ヨアネスの 1302 年暮れの書簡も転写していない。総主教に就任した順に書簡を収録するのなら、グレゴリオス、アタナシオス、ヨアネスと来なければならないのに、アタナシオスが最後に位置するのも奇妙に見える。もし彼がパキュメレスの史書を参照していれば、辞任に関する書簡を順に並べることは何の造作もなく行えたはずである。これらの疑問点は、シェフチェンコが推論するとおり、シナイ写本の写字生がパキュメレスの史書から独立して作業した可能性を示唆する。シェフチェンコからシナイ写本の問題について質問を受けたファイエは、その後、シナイ写本の四書簡のテ

---

<sup>49</sup> Pachymérès, *Relations historiques*, XI, 24 ; Laurent, *Regestes*, Appendix, no. 2. アタナシオスが皇帝にも破門が及ぶことを文面で示唆していたことから、1297 年の破門状の発見は皇帝と聖職者らに大きな衝撃を与えた。アタナシオスはこの騒動に対する謝罪および破門の無効性を書簡によって表したのである。

<sup>50</sup> Ff. 29v-30r ; Pachymérès, *Relations historiques*, VIII, 9 ; Laurent, *Regestes*, no. 1517.

<sup>51</sup> Ff. 30r-30v ; Pachymérès, *Relations historiques*, X, 29 ; Laurent, *Regestes*, no. 1583.

<sup>52</sup> Ff. 30v-31r ; Pachymérès, *Relations historiques*, XI, 6 ; Laurent, *Regestes*, no. 1587. この書簡に関してシェフチェンコとファイエ (Albert Failler, 'La tradition manuscrite de l'Histoire de Georges Pachymérès (Livres VII-XIII)', *Revue des Etudes Byzantines* 47 (1989), 91-181, at 174) は同じミスをしている。すなわち両者はともにこの書簡を、ヨアネス・コスマスが 1302 年の暮れに記した書簡 (Laurent, *Regestes*, no. 1585) としているが、明らかにこれはヨアネスが 1303 年 6 月 21 日に記した書簡 (Laurent, *Regestes*, no. 1587) である。ファイエの論文の 177 頁の表は、1302 年暮れではなく、1303 年 6 月の書簡に対応している。

<sup>53</sup> Talbot, *The Correspondence*, no. 2.

クストをパキュメレスの史書のテキストと比較し、シェフチェンコと同じ結論に達している<sup>54</sup>。

シェフチェンコはアタナシオスの書簡表題に総主教の語が添えられていないことから<sup>55</sup>、写字生が 1303 年の前半、すなわちアタナシオスが復位する 6 月 23 日以前に作業した可能性を指摘しているが<sup>56</sup>、より重要と思われるのは、パキュメレスとシナイ写本の写字生が、アタナシオスが実際に書き送った（あるいは隠し置いた）現存しないオリジナルの書簡から転写した可能性と、それらの書簡がアタナシオスの主要な書簡写本ではない、シナイ写本とパキュメレスの史書に保存されているという事実である。大教会の高位聖職者であったパキュメレスはもとより、シナイ写本の写字生もコンスタンティノーブルのどこか、アタナシオスら総主教から送られた書簡を難なく参照できる場にいたはずである。彼らの書簡を転写するうえでより恵まれた場所にいたのはパキュメレスである。彼はその生涯のある時点で同時代史の執筆を志したはずであり、彼のこの決意は、彼が総主教の辞任関係の書簡をシナイ写本よりも多く引用しているという事実からも窺える。重要な出来事が生じるたびに彼はメモを取り、重要な文書を目にするたびに彼はその写しを取ったであろう。シナイ写本は彼自身の長大なテキストとともに、こうしたパキュメレスの歴史家としての地道な努力を示唆する。なぜなら、シナイ写本の写字生が同時代の総主教の辞任に関する書簡を転写しようと欲したとき、彼ないし彼女が参照できた書簡は、写本にある 4 通に限られていたと思われるからである。1297 年に発見された破門状を含め、シナイ写本にないアタナシオスの 1293 年の書簡群は、最終的にはパキュメレスが私物化ないし私蔵したのかもしれない<sup>57</sup>。少なくともこれら総主教の書簡に関して確実なのは、当時のコンスタンティノーブルにアーカイヴ的な施設は存在しておらず、政治的に重要な書簡ですら、一定

---

<sup>54</sup> シェフチェンコはシナイ写本の書簡テキストとパキュメレスの史書のそれとの関係性について、ファイエに書簡で問い合わせたことを明かしている。Ševčenko, 'A new manuscript', p. 229, n. 27. Failler, 'La tradition manuscrite', 177 も参照。

<sup>55</sup> アタナシオスの書簡見出しは 'Τοῦ κυροῦ Ἀθανασίου', 邦訳すれば「アタナシオス殿の（書簡）」となる。他の書簡では名に 'τοῦ πατριάρχου（総主教の）' の語が添えられている。Benešević, *op.cit.*, p. 26.

<sup>56</sup> この主張は、3 番目のヨアネスの書簡が 1302 年暮れに書かれたという誤解と関係している。同書簡とアタナシオスの復位との実際の間隔は、1303 年 6 月 21 日から 23 日までの 3 日間であり、この間に書簡がシナイ写本に転写されたと想定するのはいささか無理がある。おそらく総主教の語をともなわない書簡の見出しは、写本に書簡が転写された時点ではなく、書簡が書かれた時点でのアタナシオスの地位を示すものであろう。

<sup>57</sup> 筆跡や署名への言及もあることから、これらの書簡の現物をパキュメレスが参照したことは確実である。

の時間が過ぎれば容易に散逸しえたことである。シナイ写本の書簡が部分的であることと、パキュメレスがグレゴリオス以前の総主教の辞任状を引用していないことはその証拠と理解できる。けれどもこのような書簡ないし文書資料の不安定性は、一部の人々に保存への熱意を抱かせるものであった。

パキュメレスとシナイ写本の写字生が共有しているのは、この保存への熱意である。おそらく彼らはともにコンスタンティノーブル市内に暮らしながら、同じ文人サークルには属しておらず、したがってその情報を共有してはいなかった。けれども彼らは、具体的理由は何であれ、不本意な形で辞任を余儀なくされた総主教の辞任状や、それに類する文書を重要とみなす点では一致していた。グレゴリオス、アタナシオス、そしてヨアネス、彼らはなぜ短期間在位しただけで総主教座を去らねばならなかったのか。彼らが辞任に際して記した書簡は、当事者による貴重な歴史証言である。パキュメレスとシナイ写本の写字生はこのような見地から、写本に転写することで、それらの書簡を散逸から防ごうとしたのであろう<sup>58</sup>。

シナイ写本とパキュメレスの史書を通じて確認される保存への熱意は、当然、アタナシオスの多数の書簡を収めるヴァティカン写本とアレクサンドリア写本にも当てはまる。この二つの主要写本を包む熱意は、少なくともパキュメレスのそれとは明らかに性質が異なる。よく指摘されるように、パキュメレスはその史書においてアタナシオスへの敵意を隠すことなく、彼のことを政治的なバランス感覚を欠く、過度に厳格な総主教として描いている。したがって彼がアタナシオスの複数の書簡を引用しているのは、アタナシオスの異常さを、歴史家ではなく、総主教自身の言葉によって、読者に効果的に伝えるためである。アタナシオスに関してみれば、パキュメレスの保存への熱意は敵意ある熱意であった。一方、主要写本のそれはアタナシオスへの敬意ある熱意であったと思われる。ヴァティカン写本の 1 フォリオ表、ヘッドピース下の表題にはこう記されている。「我らが聖なる父コンスタンティノーブル総主教アタナシオスの、皇帝とその他の人々に宛てられた、その大いなる神的熱意を顕示する書簡」<sup>59</sup>。アタナシオスが記した書簡は写本に転写され、保存され、後代に伝達されねばならなかったのである。敵意からであれ敬意からであれ、その特異な熱意を明るみに出す、彼自身による証拠として。

<sup>58</sup> シナイ写本において、ブレミデスの君主鑑の直後にこれら総主教の書簡が配されていることには、何らかの意味が込められているようにも思われる。

<sup>59</sup> 原文は上の注 26 を参照。「我らが聖なる父」という語句はアレクサンドリア写本の最初のアタナシオス書簡の表題にも記入されている。Moschonas, *op.cit.*, 185.